

〔物語〕 関東大震災からの復興と築地小劇場の興起―小山内薫、土方与志、山本安英、東山千栄子―

第八節 愛と青春への築地讃歌（第一年八月『アルト・ハイデルベルヒ』）

柿落しの『海戦』に続いて、第二回公演はロマン・ロラン作『狼』、第四回公演にチャベック作『人造人間』と重厚な作品を続けた築地小劇場では、夏期の演目として清新な戯曲『思い出』（『アルト・ハイデルベルヒ』）を提供した。身分と因習を超えた南ドイツの恋物語であって、古都ハイデルベルヒへ留学に来たA公国の嗣子、ハインツ王子は、長期滞在の宿としてホテルを避け、河畔の宿屋兼居酒屋を選ぶ。そこでは宿主リュウダアの娘ケティイが、歓迎のため花輪を用意していた。階下の居酒屋へは多数の学生が出入りし、B公国の男爵デトレーヴもそのひとりであった。築地におけるこの企画は、夏休みの学生など若い観客の共感を博するとともに、主演の劇員ふたりがやがて愛し結ばれる端緒ともなる。

ウイルヘルム・フェルスタア作・松居松翁訳『アルト・ハイデルベルヒ』（『思い出』）

第二幕 第九景

ハイデルベルヒなるリュウダアが酒屋の庭。低き石垣はネッカア河より庭を隔つ。はるか彼方に、

ハイデルベルヒの王宮見ゆ。

王子 （一同に対し軽く拳手の礼をする。王子は少しくはにかめる様子なり）

博士 あれがネッカア河でございます。殿下、あれがお城で有名な場所でございます。

王子 なかなか好い処だね。

ルッツ 失礼ながら殿下、この家は―

王子 （ルッツを押しやって）そこでこの娘は―（笑いながら）花環をもってるな！

ケティイ （詩人を読む）

「遠き国よりはるばると、

ネッカアの河辺に住むべく、

ここに来ませし王子の君に、

香しき春の花もてつくれる、

花束をささげまつる。

いぎ、楽しくここに入らせ給え。

かくて再びここを立去り給わん時、

君に忠実を忘れざりける、

ハイデルベルヒ学生時代の、

身の幸福を思いしのび給え。

さあ、これを取って下さいな。（敬礼して花環を王子に渡す）

王子 （はにかみて、やや堅くなりて）有難う！（花環にてをかける）

ケティイ さあ、取って下さいな。

博士 Bravo! なかなか美事にできた。名は何というな、娘さん。

ケテイイ (敬礼して) ケテイイって云います。

王子 どうも有難う!

ルッツ 失礼ではございますが、殿下、わたくしは殿下の御注意を願いたいと、

博士 (ルッツを側に押しやって) それからこれが亭主か。

リュウダア このハイデルベルヒでは手前ほど名誉なものあ、ありやしません。手前はヨーゼフ・リュウダアと申しましてな、これが手前の女房でござえます。済みませんが、一つ王子さまに部屋を見ていただきてえもんでー

王子首肯して、後よりつづかんとす。

ルッツ 殿下に御注意をお願い申します。この家はどの点から申しましても、殿下のお住いには不適當でございます。・・・特別に殿下の御注意を願いたいのは、この家の階下は酒屋に使用されている事でございます。学生や、その他あらゆる種類の人間どもの集合所になっておりますので。兎に角今日のところホテルへお室を取りますよう、殿下よりもご命令が願わしいのでございます。そう致しますれば、わたくし即刻ホテルの方へお荷物を運びますでございます。

王子 (決しかねて) もしおまえがそのようにいうのならー

ケテイイ (一歩進み出して、哀訴する如く) いけません!

博士 (笑って) 兎に角殿下が御自身で御検閲の上、お決めになるがよかろうと思えます。

王子 (はつきりと) そうしよう!

第二幕 第十三景

デトレーヴ (燈火で透して見て) 君あ、学生じゃないのかねー一期生だねーきよう新しく着いたのかね。

王子 そのとおり

デトレーヴ (呼ぶ) ケアラマン、麦酒をもって来い!

ケアラマン 畏まりました。伯爵さま! (麦酒を二杯持ち来る)

デトレーヴ 人に邪魔をされないようにして、僕はこの紳士としづかに麦酒を飲みたいんだ。僕はサキソニアの伯爵フォン・アステルベルヒといいます。君、幸運は君をここへ連れて来たんだ。

・・・さあ、乾杯をやろう!

王子 (コップを打ちつけて) 君の健康も祝そう。

デトレーヴ 君、ハイデルベルヒの人間になっても、一日だけは学生帽もかぶらず、バンドをつけずにいてもいいが、しかしそれはたった一日だよ。ハイデルベルヒの美とはなんぞやだ。バンドに、学生帽に、友達に、決闘の剣じゃないか。ええ・・・

音楽手 「いざ、あい共に酌まん」を奏し、学生等これをうたう。歌は距離のために、いとものさやしくなりながら、夜気をとおしてひびく。

デトレーヴ ハロー! やあ、奴等は歌をうたっている。君はあの歌を知ってるか。

王子 いいや。

デトレーヴ 無論君は知らないさ。・・・君は一体独逸人がどこで詩を学ぶか知ってるかね。ええ君、僕

等のところだ。独逸の大学でだ。

おのが住む今の世になにかいはむ、

ただうたわん、Ergo bibamus ㄨ。

そはよのつねのものならで、

とこしえによるこびを与う bibamus.

そは家々に友をあつめ、

雲を輝かせ、花を咲かしめ、

美しいの幻をあらわす。

いざや杯をあい触れ、さてうたえ、bibamus ㄨ

さあ、君、君の健康を祝そう！ God save the king ㄨ 友情万歳。

王子 友情万歳！

第三幕 第五景

リュウダアの王子の室。古風なるフランク式にかざられた室内は、過去の市民の優美の佛をしのばしむ。・・・朝日はハイデルベルヒを透し見らるる窓にかがやく。一つの窓の前にはいろいろの色の日覆いあり。他の窓は開かる。雀そと面にて囀る。

王子 窓をおあけ。(王子は一方の窓に対して立ち、ケテイイは他の窓の前に立つ) なんといい好い天気だろう！木の芽の吹き出しそうな天気だ。ケテイイ、おまえにはお城で落ち合うとしよう。

十時か十一時に。そしてあそこへ他の連中をのこして置いて、二人は二人っきりで外へ行こう。

ケテイイ どこへ行きましょう。

王子 ケイニヒトールへ行こう。

ケテイイ ヴォルフスブルンネンへも行きましたようか。・・・

王子 僕たちは若い、ケテイイ。僕たちは自分の青春を楽しもう。彼奴らは僕を鎖で繋いでいた。あいつらは人生をいつまでも幸福にするあらゆるものを奪ってしまった。ーぼくらはなにか狂気じみた事をしよう。今まで誰もやった事のない狂気じみた事をやろう。二人で一緒に世界中を旅してまわるんだーでなければ少なくとも巴里まででも。

ケテイイ 巴里まで？

王子 そんな事はなんでもない。僕たちは一晚汽車へ乗って行くと、翌朝は巴里に着いているんだ。まあ考えて御覧！

第五幕 第七景

ケテイイ もう少しいて下さい。

大公 (ケテイイを側へ引き寄せ) ケテイイ！

ケテイイ (大公にもたれかかり、その肩に両手をかける) こう少しいて下さい。

大公 ケテイイ、わたしはもう来ないよ。

ケテイイ カアル・ハインツ！

大公　これがハイデルベルヒへの最後の旅行であった。そして、もうこれほど好い旅行はできないであるう。もうこれからは何もかも変ってしまおう。ケティイ。きっと変わってしまうよ。

ケティイ、大公の頬をなでる。さながらおのが愛蔵のあるものを、永久に失わんとするとき、最後にふたたびそのものに手を触れんとする人の如く。

大公　わたしたちは自分の心を抑えなければならぬ。ケティイ、わしはおまえを忘れはしない。おまえもわしを忘れはしまい。わたしたちはもう二度とふたたび逢うことはあるまい。それでも二人は忘れはしない。わしはハイデルベルヒが恋しかった。そして、わしはおまえが恋しかったーわしはまたおまえに逢えた。(長々しくケティイに接吻する。大公退場せんとする。)

ケティイ、大公を見送りつつ、両手を力なく垂れたるまま、悄然として立つ。

大公　(ふたたび振り返り) おまえはたった一人だ、ケティイ。この世界でおまえはたった一人だ。わしが、愛しいと思ったのは！

ケティイ、しばらく大公を見送って黙然として立つ。かくておのが顔に両手をあて、烈しくすすり泣く。

―幕― ①

① ウイルヘルム・フエルスタア作・松居松翁訳『アルトハイデルベルヒ(思い出)』(『世界戯曲全集』世界戯曲全集刊行会、一九二九年。二一九、二四六―二四七、二五三―二五五、二六四―二六五、二六六頁)

『思い出』(『アルト・ハイデルベルヒ』) 配役

第九回公演 八月九日―十八日 毎夕七時

王子(大公)	友田恭助	博士	青山杉作	ルッツ	汐見洋	国務卿	河原侃二
侍従長	小野宮吉	デトレーヴ	千田是也	侍従	藤輪和正	ケアラマン	東屋三郎
ケティイ	田村秋子	リュウグア	丸山定夫	その妻	山本安英	その他学生たち多数	
演出	土方与志	演技監督	青山杉作	装置	溝口三郎	配光	岩村和雄 ①

当公演に際し頒布された『築地小劇場』第一巻第三号には『アルトハイデルベルヒ』に関する解説が掲載され、その大要と結末も述べられる。

マイエルフェルステル『思い出』(『アルト・ハイデルベルヒ』)

堅苦しい宮廷の四角張った礼儀作法の中に教育された王子が、非常に寛大な教師の保護の下に、大學へ送られる。そこは言わば葡萄と詩とが土から生えたような処である。初めて彼は毒されない空気を吸うのである。初めて彼は学生生活の豊かさを、杯の悦びとはてしない楽しさを味うのである。初めて宿屋の可愛い娘

① 水品春樹著『新劇去来―築地小劇場史(復元)その他』一二五頁。

に、礼儀張らない自然のままの、優しい愛想のいい唇の女を見出すのである。その青春が彼女に傾き、人が二十歳時代に恋を知る如く恋をするのである。

位にあらせられた大公が崩御されたので、カアル・ハイントツは政治を執るために呼び返される。彼は自国の領国へ帰った。しかし、王冠は彼にとって荊棘に過ぎなかった。昨日の青年は厳格な支配者である。彼の心は、真珠のように輝く杯に、頬を火照らして歌った、あのネツカアの彼方へと飛ぶのである。そして今やかれは宮廷で生長し、朝臣や忠言者は彼の一挙一動を嗅ぎ廻る。かくて自由の夢への憧憬、夜も昼も彼を悩まし、彼の胸を裂く思いをさせる。彼は学友のところへ、佛いまま胸に生くる下宿の娘ケテイイのところへ帰らずにはいられない。嗚呼、しかし事情は昔のままではなかった。彼を迎えるのを悦ぶしがない。ハイデルベルヒにおいても、宮廷と同じく堅苦しい礼儀作法があった。しかし、昔のままなる一人がいた。それはケテイイである。・・・彼等二人は幸福な幾時間を過したすが、すぐに別れを上げなければならぬ。彼女は心傷つきながら許嫁のもとに行く。そして王子は道徳の砦の中へ帰っていく。・・・

こんな事は偉大な事でもなければ、深刻な事でもなければ、批評家たちに攻撃されないことでもない。単に絵のような抒情的な小詩人の可愛い民謡のようなものに過ぎない。しかし、魅力ある「青春」は全体の話や取扱に残りなく書かれている。数時間人生の苛酷な現実に悦ばしい対照をなして、歌や絵や恋の場面が浮び出る。自分の山国を、国家を、学生生活や恋愛の幸福な日を忘れない独逸人はもつとも幻想的な人生の記

録の楽しい数頁を翻すことには、人間的であるが故に、魅せられるであろう。①

『アルト・ハイデルベルヒ』は一九〇一年ベルリンで初演され、以後一年間にドイツ各劇場での公演一五〇〇へ達し、五年後パリでは自由劇場の創始者アンドレ・アントワーヌがこれを導入した。ロンドンにおいては公演二五〇回におよび、フランス、イタリヤ、スカンディナビヤ、インド、オーストラリアでも人気を博したとされる。② なお、この戯曲を翻案したミュージカル『学生王子』は一九二四年ブロードウェイのジョンソン劇場で初演がなされ、六〇八回のロングランを記録した。

水品春樹による記録には大正十三年八月の築地小劇場をめぐる、劇員一同や支援する若人の青春謳歌も誌される。銀座の洋品店や飲食店は、『アルト・ハイデルベルヒ』に感激した彼らで夜遅くまで賑わった。これに先立つ七月の公演から千田是也、竹内良作、丸山定夫、山本安英、田村秋子も研究員との身分から劇場員へ昇格されていた。

第一年度の八月三日より三週間日曜以外毎日午前中、かねて計画の演劇夏期研究会が小劇場で催された。

① イルヘルム・マイエルフェルステル『思い出』（『アルト・ハイデルベルヒ』『築地小劇場』第一巻第三号、六二―六四頁。

② 「アルト・ハイデルベルヒの雑話」『築地小劇場』第一巻第三号、六四―六五頁。

熱心な講習生が五十名ばかり集まり、この中に後年の名優滝沢修もいた。

一方九日から十日間毎夕七時から『思い出』(『アルト・ハイデルベルヒ』)が上演された。誰か青春と歌と葡萄酒を愛せざらんや。みんな若かった。元気だった。暑中休暇に帰省しないで、この劇に参加したり、観にきたりする学生たちも多かった。

音楽は嬉しく、ホリジントは美しかった。舞台も客席もただ青春に酔った。こうしたなかに、『思い出』の王子の友田と酒場の娘ケイイの田村秋子の、舞台そのままの現実の恋が育まれていったのである。

銀座の夏の夜はおそくまで賑やかだった。ライオン・ビヤホールを覗けば、土方と東屋と千田と丸山がいる。小山内が汐見と和田とタバコ(レストラン)に入って行く。北村と高橋がブラントンに向かって歩いている。千足屋の二階に誰かの築地帽がみえる。彼らの仕事は嬉しそうだった。軽快なハンティングに胸間の葡萄のマーク。新しい演劇の選士にふさわしい新鮮な雰囲気、その各々の特有さにおいてかもしだしつつ、ひとりひとりそれは美事に澁刺としていた。それもそのはず、彼らの平均年齢は二五、六だったのである。限りなき未来をもつ若者たちだったのである。①

学生王子に扮した友田恭助(伴田五郎)と宿屋の娘を演じた田村秋子は、同年十月シュニツラー作『恋愛三昧』でも共演し、二人が婚約するのはこの時期である。小山内薫の媒酌によりその冬結婚した秋子は、家庭的な拘束

① 水品春樹著『小山内薫と築地小劇場』町田書店、一九五四年、九四頁。

を克服し、昭和三十年代まであるいは新劇の舞台に、あるいは映画の俳優として活躍した。配偶者の友田は昭和十二年惜しくも上海で戦死するが、忘れ形見伴田英司との親子対話において、彼女は築地でのロマンスを懐かく回想する。

舞台での共演から恋愛と結婚へ(田村秋子・伴田英司著『友田恭助のこと』)

田村秋子 八月は夏休み中の学生相手に、気楽な芝居をやったらというんで、『アルト・ハイデルベルヒ』

(『思い出』)をやることになったのよ。

伴田英司 大正十三年八月九日から十日間。だけど、どうなのかな。夏休みじゃ、学生は東京を離れてるんじゃないかな。……

田村秋子 『アルト・ハイデルベルヒ』の頃になると、五郎(友田恭助)さんも予備役招集から解放されて

ね。築地小劇場での彼としては、はじめて大きな役をやった芝居なのよ。これはいつてみれば、学生生活謳歌しているようなないようだね。ある王国の皇太子が、進歩的なユツトナー博士のおかげで一般学生とともにハイデルベルヒの学生生活を楽しんでいる所へ、急に父の王様が死んだために、やむなく中断して帰り、再び今度王様になって訪れたときには、もう前のようににはあつかわれなかった。ただケイイという娘だけが、なつかしそうにかけだしてやって来るけど、やっぱり悲恋に終わるといいう、甘い芝居なのよ。築地小劇場の首脳部は、このケイイの役では相当困ったあげく、大変な決断をもって、あたしにやらせることにしたらしいわ。

伴田英司 なるほどね。

田村秋子 あたしはそれまでおばあさん役ばかりだった所へ、急に若い役をやることになっちゃったんで、どうも具合が悪かったわね。何か不自然な感じだし、紅一点みたいなやくだから、日常生活であんまりもてた経験もないから、よけい困ったわ。それに五郎さんとのラブ・シーンがあるのよ。ところが演出の土方先生は、これまでの日本のラブ・シーンはどうも不自然でおかしいから、今度は本物で行こうっておっしゃるのよ。あたし本当はいやだったんだけど、断ったことで、へんにこだわると思われるのもいやだったから、やりますって言ったんだけど、結果はラブ・シーンを本当にやったからと言って芝居自体がよくなったかどうかはわからないと思ってるわ。・・・

伴田英司 親父さんはどうだったの。

田村秋子 五郎さんは、若い皇太子のときは何かいや味で、あたしはいやだったけど、何年か経って王様になり、落着いて出て来たときは、大変いいと思っただわ。それまでにあたしの知っている五郎さんの舞台は、『人形の家』とか、その後のもので『幽霊』は未だ見ていなかったから、何だかこの人どこがいのかと思っただわ。『アルト・ハイデルベルヒ』の王様になってからの王室の場ではじめて、なかなかいいものを持っているんだとおもったわ。

伴田英司 この芝居は学生の歌なんかもあって、なかなか大変だったんじゃないの。

田村秋子 だけどね、これも私が驚いたことなんだけど、築地小劇場の男の人達のほとんどが、渡された楽譜をすぐ読んだし、ドイツ語の歌詞も平気だということね。みな歌の素質もあったんじゃないかと思っただわ。うーくらい、うまく合唱してたわ。・・・舞台装置もハイデルベルヒのお城が遠くに見え、ネッカア河、

それに添った家とか、森のあたりにはちらちら灯が輝いて、なかなか素敵だったわよ。ちょうどこの芝居の最中に世間では、五郎さんとあたしが恋愛関係にあるといわれてたけど、別にそうではなく、相変わらずだったわね。五郎さんっていう人は特に相手役には心づかいをする人だったのよ。・・・『夜の宿』のあとはシュニツラーの『恋愛三昧』でしょう。前にも話したけれど、青山先生、五郎さんは帰りの道々、よく『恋愛三昧』を話題にしていたわ。五郎さん、この芝居ではテオドルをやったんだけど、以前のわかもの座のレパートリーのなかにもあったらしいのよ。・・・

伴田英司 なかなか大勢で仕事をして行くのは、むずかしいね。

田村秋子 丁度この芝居（『恋愛三昧』）の途中だったとおもうけどね。ある日五郎さんがいやに真面目くさってやって来てね。「いちどお父さんにお会いしたいと思うんだけど」っていうのよ。だからあたし「一体どういう事ですか」って聞いたたら、「あなたと一緒に芝居をして行きたいから、結婚してもらいたいんです」っていうのよ。・・・だけどその自分のあたしは、五郎さんは八重子さん（水谷）と結婚する人とはばかり思っていた訳よ。そのとき話したわ。自分としては築地小劇場をはじめるとき、八重子さんに女優として来てもらいたい、結婚してもらおうと思っただわ。八重子さんのお兄さんの竹紫さんに話に行った所、八重子さんは芸術座をやっていたからと、そっちは解決しているんですっていう事なのよ。それでとにかく一度お父さん（田村西男）とお会いしたいっていうから、あたしの家は本人しだいなんだから、あたしがきめていいんだと思ったら、「じゃあ、結婚してくださいか」というんで、あたしはいいと云ったのよ。

伴田英司 だけど親父さんも相当だね。あなたと一緒に芝居がしていきたいから結婚して、なんてころし文

句いちゃあてき。・・・

田村秋子 この舞台（『朝から夜中まで』）は成功した初期の芝居の一つよ。丁度この芝居の楽の日だったけれどもね。小山内先生があたしと五郎さんの結婚の発表をなさったのよ。・・・だけど五郎さんとの間にこういう事はあったわ。結婚式まぢかになって、式の日取りとか何かと一応きまって、案内状なんか出している頃だったの。五郎さんがあたしにいうのよ。「結婚したら自分は芝居はしないで欲しんだけど」って。所があたしにすれば、五郎さんが「あたしと一緒に芝居がして行きたいから結婚してくれ」っていったんで、あたしもその気になったんだからね。何だか話が違う様な気持ちになって、どうしてそんなことになったか、問いつめたのよ。そうしたらまあ、伴田の家の方では、来てくれるなら嫁らしくしてくれなきゃ困るっていう事なのね。五郎さん中にはいって、大分こまったらしいけど、あたしは「そんな話になって芝居をやめなきゃならないんなら、結婚はやめる」っていい出したもんだから、五郎さんすっかり困っちゃってね。「いずれじきに芝居は出来るようにするから、ほんの当座だけそういう形にしてくればいいんだから」とか難とかあたしに諒解を求めようとするし、とうとうおじいちゃんが「まあ、とにかくそれでいいんじゃないか」っていう事でけりがついたの。それから普通なら嫁入り支度でとにかく忙しいものだと思うけど、こっちはいたって暢気で、地震で焼けて何もありませんとことわってはあったけれど、正直なくらいそのとおりの何もなかったわ。・・・何かを創り出そうとしている築地小劇場に、ただ夢中になってくっついていた時だったから、何が何でも、あたしは芝居がしたかったのよ。そりゃ、今ならいろいろ考える材料も沢山あるから、或いは迷ったかのしれないけど、当時はただ夢中で芝居だけがしたかったわ。

伴田英司 すごいね。

田村秋子 結婚式の当日がすごかったのよ。とにかく一日の内に一年中のものが全部降っちゃったみたいな日だったからね。雨が降って、雪が降って、雷がガラガラ鳴って、曇りから風になって、やっと晴れたんだから、伴田の家じゃ、こりゃ大変なお嫁さんが来たと思っただでしょうよ。式をあげた日比谷大神宮は、たしか今でいうと宝塚劇場のあたりだと思っただけで、やっぱり震災で焼け落ちていて、仮普請のお宮が淋しくちよこつと残っているだけだね。なんだか野天で結婚式をやってるみたいな感じだったし、媒酌をお願いしたんで、小山内先生がずっとそばにいらっしやるでしょ。何だか結婚式とはどうしても思えないで、まるで舞台稽古をしているような気分だったわ。①

こうして愛と青春を謳歌する人たちが多大の影響を受けたのは、厨川白村の著作『近代の恋愛観』であった。ヨーロッパにおける愛の思想と文学を辿る彼は、恋愛至上主義を標榜するエレン・ケイの論著やビョルンソンの戯曲をも推奨する。白村の論稿は大正十年九月より朝日新聞等に連載され、補論も加えて震災の前年十月に刊行された。大地震勃発の日鎌倉の別荘で静養中であった彼は、避難の途上夫人もろとも津波に襲われ、隣人に一旦救出されたが、翌日気管支炎で逝去した。

むかふに小さな塔が残つてゐる。八重むぐらの蔽へるに任せたこのさ、やかな櫓のあと、それは昔王侯が嬖臣寵妃をあつめて、戦車競走をながめた宏大な演技場の跡でもあらうか。

その塔のなかに身を潜め、こよひ男との逢瀬を待ちわびる金髪白面の少女がある。男の來たるを今や遅しと胸轟かしながら、息をこらし目を見張つて佇んでゐる。恋人が來れば、つと歩み寄つて二人はたちまち無言にして相抱くであらう。黄金の戦車、百萬の大軍、今は影をも留めて居ない、残れる者は僅かにこの廢墟ではないか。しかし男と女との戀、そこには今も昔も變りない永遠性があり恆久性がある。千歳を隔て、なお滅びざるものは両性の恋だ。幾世紀間の馬鹿騒ぎ、無駄骨折り、その勝利をも光榮をも黄金をも、すべてを皆葬り去れ。戀のみが至上である。

『廢墟の戀』と云ふ美しい歌に、詩聖ブラウニングはこう歌つた。その歌のこゝろを、バアン・ジヨオンズがまた絵にもかいた。...

恋愛讚美、女性讚仰はおろか、女を人として考えることさえ知らないで、みずから国粹を説き、文化を口にし、五大国民の一つなどと独りよがり、自惚れる人種がある。この人種は不思議にも男女関係を常にさげすみ根性でみることに慣らされている。何でも男と女がちよつと立ち話をしていても、たちまち猜疑のまなこを光らす。いわんや両性の恋愛関係と見れば、それを愚弄したり嘲弄したり、面白半分にかつたり、それでも気が済まなければ、今度は恋愛を罪悪視し背徳乱倫呼ばわりまでしようという恐ろしい人たちである。記紀万葉のごとき古代の文献に徴しても、また平安朝の文学に現れた所を考えてみても、

日本人は本来もつと自由に、もつと解放的に、もつと正しく両性関係を見ることのできた聡明な人種であつたのだ。...

恋愛の心境においてのみ人はもつとも完全に人でありうる。たんに生殖という問題を外にして考えてみても、男は男一人では完全なものではなく、女は女一人ではけつして完全なものではありえない。卑近な場合を取つてみても、一生の間ひとたびも恋を味つたことのないような人、あるいは終生全く異性に接しないような人には、人として必ずどこかに大きな欠陥がある。この事実に向つて古代の希臘人はプラトン一流の詩的な神話的解釈を下した。すなわち人間はもとひとつであつたのが、後に男と女という二つの性に分れたのだ。分れた男女は各々不完全なものであるがゆえに、その分裂のために悩み、お互いに地上生活において、再びあい合して同心一体にならうとする。...真の人間の恋愛はここに生ずるのだと云う。この点においてプラトニズムの所説は、人生の實際現象の真を単に詩化して説いたものに他ならないと思う。

人間は孤独ではありえない。個性の發達したもののほど、この孤独寂寥を感じることもまた甚しい。そしてこの「心の寂しさ」が何ものによつても癒されえないとき、そこに恋を思う心は芽ぐむ。かれは異性の靈と肉によつてこの寂寞から救われようとするからだ。異性によつて救われようとする熱烈なあこがれ、それがすなわち恋愛ではないか。...

結婚によつて恋愛は一段落に達する。達してのちさらに新しき時期に入り、壮年期より老境に及び、最初の花々しい浪漫的恋愛はその光と色とを失うと共に、深潜的となり内在的となつていくたびか姿を変える。

恋愛結婚によつて成立した夫婦間におけるかくの如き永続性の恋愛は、単に戯曲小説が吾等に示す所の空想でも仮構でもない。私は遠い過去やあるいは外国のことではなしに、眼前日本の家庭においてさえ現にし

ばしば之を見ている。私はその適切なる一例として、与謝野夫人がみずからしるされた一節をここに摘録しよう。

「私達は二人の愛情にたえず新しい生気を吹込み、壊しては建て直し、かつ鍛え、かつ深め、かつ醇化する事に努力しました。今から振り返って見ると、最初の頃の私達の恋愛は熱烈ではあるが、まだ甚だしく苦勞の足りない、塩気の乏しいものでした。私達は久しい間に幾千回の破壊と改造とを自分の恋愛に実行してきたのです。私達の夫婦関係は毎日々々新規時き直しを試み、毎日々々以前にない新しい愛の生活を築きあげていりのです。」（与謝野晶子「愛の創作」『明星』大正十年十一月号）①

① 厨川白村著『近代の恋愛観』改造社、一九三二年。二一三、一四九―一五〇、二〇六―二〇八